



知床日記

和装本

ル 4
3754



門 凡 4
3754

東西蝦夷山川
地理取調紀行

知床日誌

多氣志樓藏版

三田氏
圖書印

凡例

一 知床^{ヒトコ}西地^{ヒトコ}にヤリ傾^{ヒトコ}は運^{ヒトコ}を^{ヒトコ}止^{ヒトコ}つ^{ヒトコ}ナ^{ヒトコ}レ^{ヒトコ}ト^{ヒトコ}の^{ヒトコ}轉^{ヒトコ}換^{ヒトコ}形^{ヒトコ}リ^{ヒトコ}シ
 リ^{ヒトコ}ニ^{ヒトコ}島^{ヒトコ}ト^{ヒトコ}國^{ヒトコ}の^{ヒトコ}存^{ヒトコ}イ^{ヒトコ}ト^{ヒトコ}コ^{ヒトコ}を^{ヒトコ}終^{ヒトコ}果^{ヒトコ}カ^{ヒトコ}川^{ヒトコ}の^{ヒトコ}源^{ヒトコ}ニ^{ヒトコ}至^{ヒトコ}ル^{ヒトコ}ニ^{ヒトコ}是^{ヒトコ}國^{ヒトコ}の^{ヒトコ}東^{ヒトコ}ニ
 沃^{ヒトコ}土^{ヒトコ}ナ^{ヒトコ}ク^{ヒトコ}不^{ヒトコ}極^{ヒトコ}東^{ヒトコ}島^{ヒトコ}の^{ヒトコ}シ^{ヒトコ}ノ^{ヒトコ}レ^{ヒトコ}ト^{ヒトコ}コ^{ヒトコ}を^{ヒトコ}終^{ヒトコ}果^{ヒトコ}カ^{ヒトコ}川^{ヒトコ}の^{ヒトコ}源^{ヒトコ}ニ^{ヒトコ}至^{ヒトコ}ル^{ヒトコ}ニ^{ヒトコ}是^{ヒトコ}國^{ヒトコ}の^{ヒトコ}東^{ヒトコ}ニ
 云^{ヒトコ}リ^{ヒトコ}則^{ヒトコ}バ^{ヒトコ}ツ^{ヒトコ}テ^{ヒトコ}キ^{ヒトコ}ハ^{ヒトコ}お^{ヒトコ}ろ^{ヒトコ}よ^{ヒトコ}南^{ヒトコ}ニ^{ヒトコ}有^{ヒトコ}ル^{ヒトコ}其^{ヒトコ}利^{ヒトコ}是^{ヒトコ}も^{ヒトコ}同^{ヒトコ}一^{ヒトコ}ト^{ヒトコ}岬^{ヒトコ}ク^{ヒトコ}ナ^{ヒトコ}レ^{ヒトコ}リ
 エ^{ヒトコ}ト^{ヒトコ}ロ^{ヒトコ}フ^{ヒトコ}ト^{ヒトコ}岬^{ヒトコ}是^{ヒトコ}ニ^{ヒトコ}崎^{ヒトコ}一^{ヒトコ}潮^{ヒトコ}勢^{ヒトコ}逆^{ヒトコ}流^{ヒトコ}ニ^{ヒトコ}山^{ヒトコ}路^{ヒトコ}ク^{ヒトコ}崖^{ヒトコ}峻^{ヒトコ}ニ^{ヒトコ}有^{ヒトコ}ル^{ヒトコ}故^{ヒトコ}オ^{ヒトコ}ル^{ヒトコ}也
 寒^{ヒトコ}當^{ヒトコ}セ^{ヒトコ}ル^{ヒトコ}者^{ヒトコ}少^{ヒトコ}ク^{ヒトコ}和^{ヒトコ}人^{ヒトコ}未^{ヒトコ}ダ^{ヒトコ}シ^{ヒトコ}ト^{ヒトコ}シ^{ヒトコ}リ^{ヒトコ}其^{ヒトコ}利^{ヒトコ}カ^{ヒトコ}ム^{ヒトコ}イ^{ヒトコ}エ^{ヒトコ}ハ^{ヒトコ}の^{ヒトコ}産^{ヒトコ}洞^{ヒトコ}チ^{ヒトコ}マ^{ヒトコ}ラ
 セ^{ヒトコ}ナ^{ヒトコ}イ^{ヒトコ}の^{ヒトコ}濕^{ヒトコ}布^{ヒトコ}ア^{ヒトコ}バ^{ヒトコ}ツ^{ヒトコ}テ^{ヒトコ}ウ^{ヒトコ}レ^{ヒトコ}の^{ヒトコ}柱^{ヒトコ}石^{ヒトコ}ニ^{ヒトコ}至^{ヒトコ}テ^{ヒトコ}名^{ヒトコ}を^{ヒトコ}付^{ヒトコ}ケ^{ヒトコ}ル^{ヒトコ}ニ^{ヒトコ}是^{ヒトコ}解^{ヒトコ}也^{ヒトコ}凡^{ヒトコ}余^{ヒトコ}未^{ヒトコ}ダ
 未^{ヒトコ}ダ^{ヒトコ}五^{ヒトコ}年^{ヒトコ}の^{ヒトコ}初^{ヒトコ}及^{ヒトコ}根^{ヒトコ}緒^{ヒトコ}ヲ^{ヒトコ}モ^{ヒトコ}ト^{ヒトコ}シ^{ヒトコ}テ^{ヒトコ}傳^{ヒトコ}ル^{ヒトコ}ニ^{ヒトコ}ベ^{ヒトコ}ツ^{ヒトコ}コ^{ヒトコ}イ^{ヒトコ}ト^{ヒトコ}イ^{ヒトコ}イ^{ヒトコ}チ^{ヒトコ}ヤ^{ヒトコ}ン^{ヒトコ}チ
 ウ^{ヒトコ}ル^{ヒトコ}イ^{ヒトコ}ク^{ヒトコ}ン^{ヒトコ}子^{ヒトコ}ベ^{ヒトコ}ツ^{ヒトコ}サ^{ヒトコ}キ^{ヒトコ}ム^{ヒトコ}イ^{ヒトコ}ウ^{ヒトコ}エ^{ヒトコ}ン^{ヒトコ}ベ^{ヒトコ}ツ^{ヒトコ}ヒ^{ヒトコ}ケ^{ヒトコ}ト^{ヒトコ}シ^{ヒトコ}セ^{ヒトコ}ケ^{ヒトコ}折^{ヒトコ}の^{ヒトコ}川^{ヒトコ}々^{ヒトコ}を^{ヒトコ}一^{ヒトコ}月^{ヒトコ}ノ^{ヒトコ}中^{ヒトコ}ニ^{ヒトコ}テ

支別志卷二 女志之志二 著
 知床を巡檢しし 知床志 卷一
 書き函館府の納め奉る愛を在卷二 稿抄し 知床志の石版
 一冊し 一冊し 書振細抄あり 是は續て是支地の譯を審し
 御書本等にあたるる等 漢名等 引用書の本又ありし抄
 舉し 一冊し 志を地を審まんと 故し 一冊の意方 原
 稿七冊と熟読ありし事なり
 明治之庚申の病儀お下各二長所依棧を愛の小意下

源の弘誌

戊辰知床日誌

伊勢 松浦竹雪 著

此の書は、予が戊辰の夏、知床を巡檢ししに、
 思ひし此の地の有るべき所、及以て地を初め、
 是の國を學び、
 是の地を信じて、
 予モ口
 去る年、
 十リ、
 山、
 藏、
 合、
 ノツケと、

知床日誌 二

トウハ工口是へトカ川の口よりフウレン川の南寄り 子モロル

トカ川中へツトカ川の結り川ありて或る原ホロトウの坂より来る程深あり

濱形東南にシユンマシエ川道にてトウバエ中より入る

厚ウレ別所より余は此の海原へ入る

其日半の波舟より大群来る色寄り又海原より入る

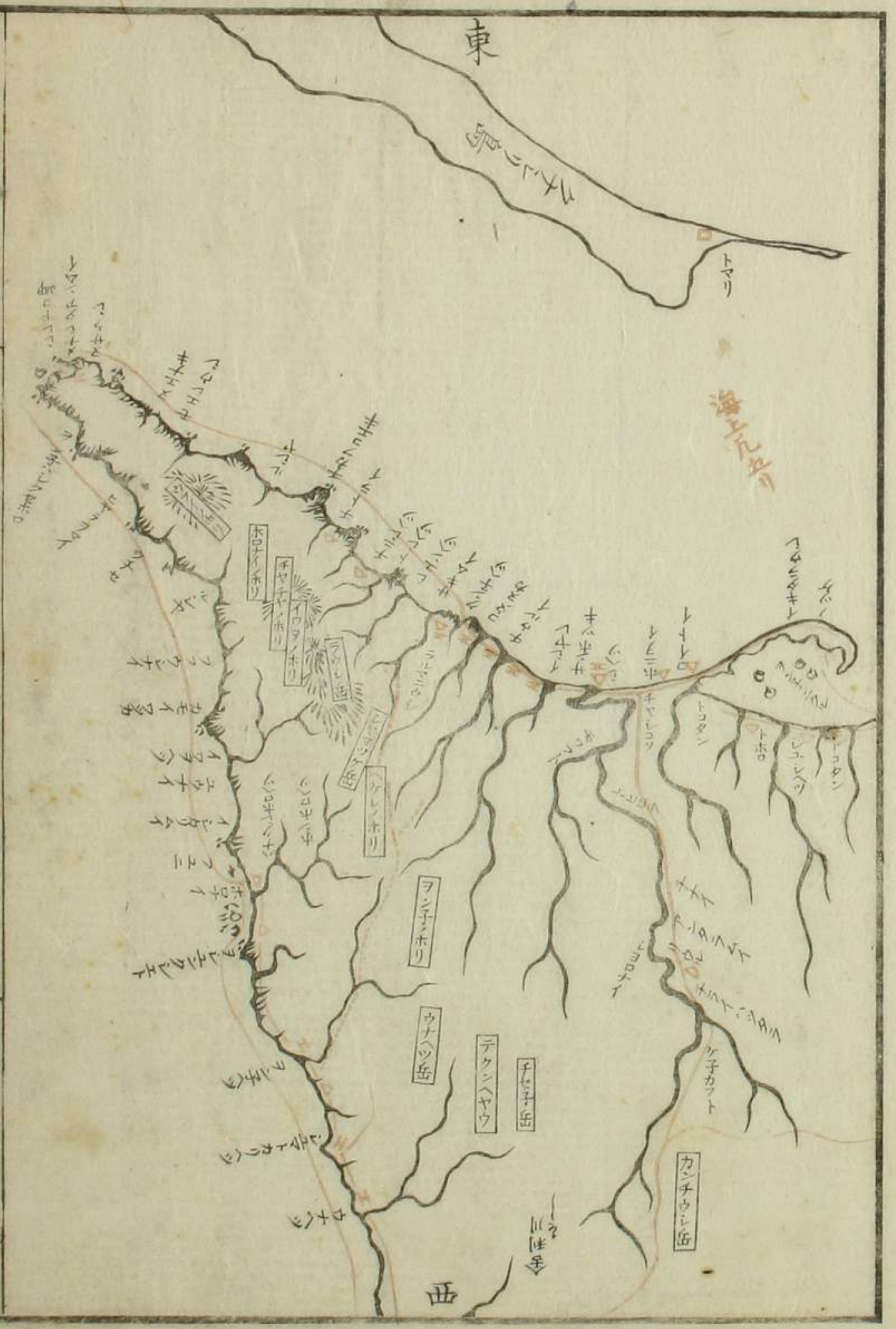
砂濱よりアシリコタン海原ルエサンサル海原よりニレヘツ

是より一渡り右よりモロルトコタンニシユンヘツと申す

ノツケ 通りを各々社札ありて 是れは此の川より出る

如くして是れノツケをノツケの流るる處より又配り

アイヨフキニヘツ 由イナシケル 此の川より夜より来る



山城の作... 頗る益を得る

廿九日... 更番舟ヲ子ニクル... 舟外より土と持身... 小麦の熟...

メナレセケホカ六番の川... 源は...

コイトイ... 海峯通り...

レベツ... 舟ヲ...

青翔... 舟長カマイサンケ...

メナレホ一の川...

舎村山道... 又多れ右テク...

由ラヲウ二の上ニ...

三日船後... 陸道...

サンホツキ... 魚...

イシヤ又... 川...

メナレホ五の川...

子てカエハイ...

多敷号... テシ子...

メナレホ六の川...

主沢沙急の美...

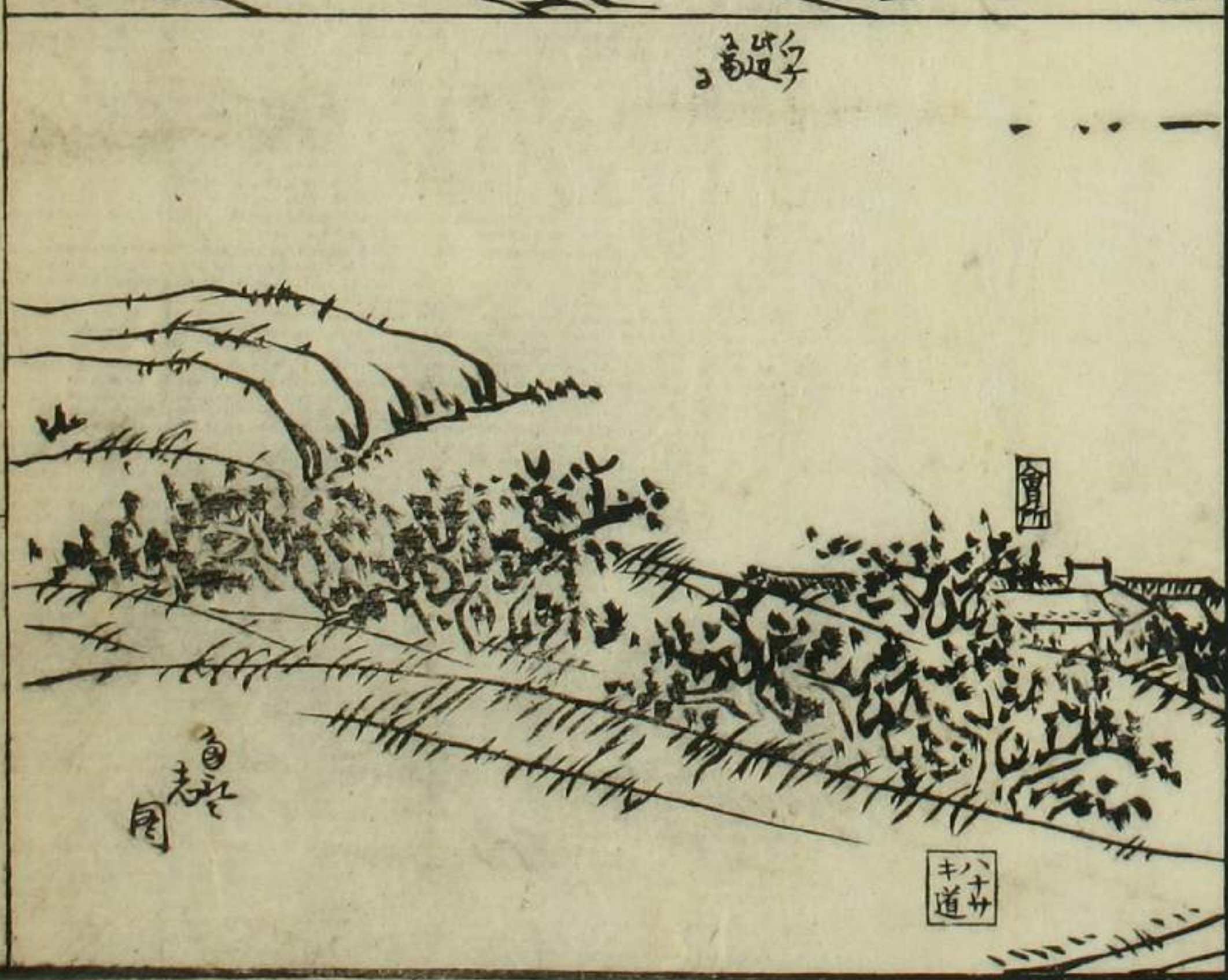
戌

亥

中戸村に
 東音の
 小川の
 水舟も
 根の
 濱
 水舟も
 七一集
 常雨

山

山

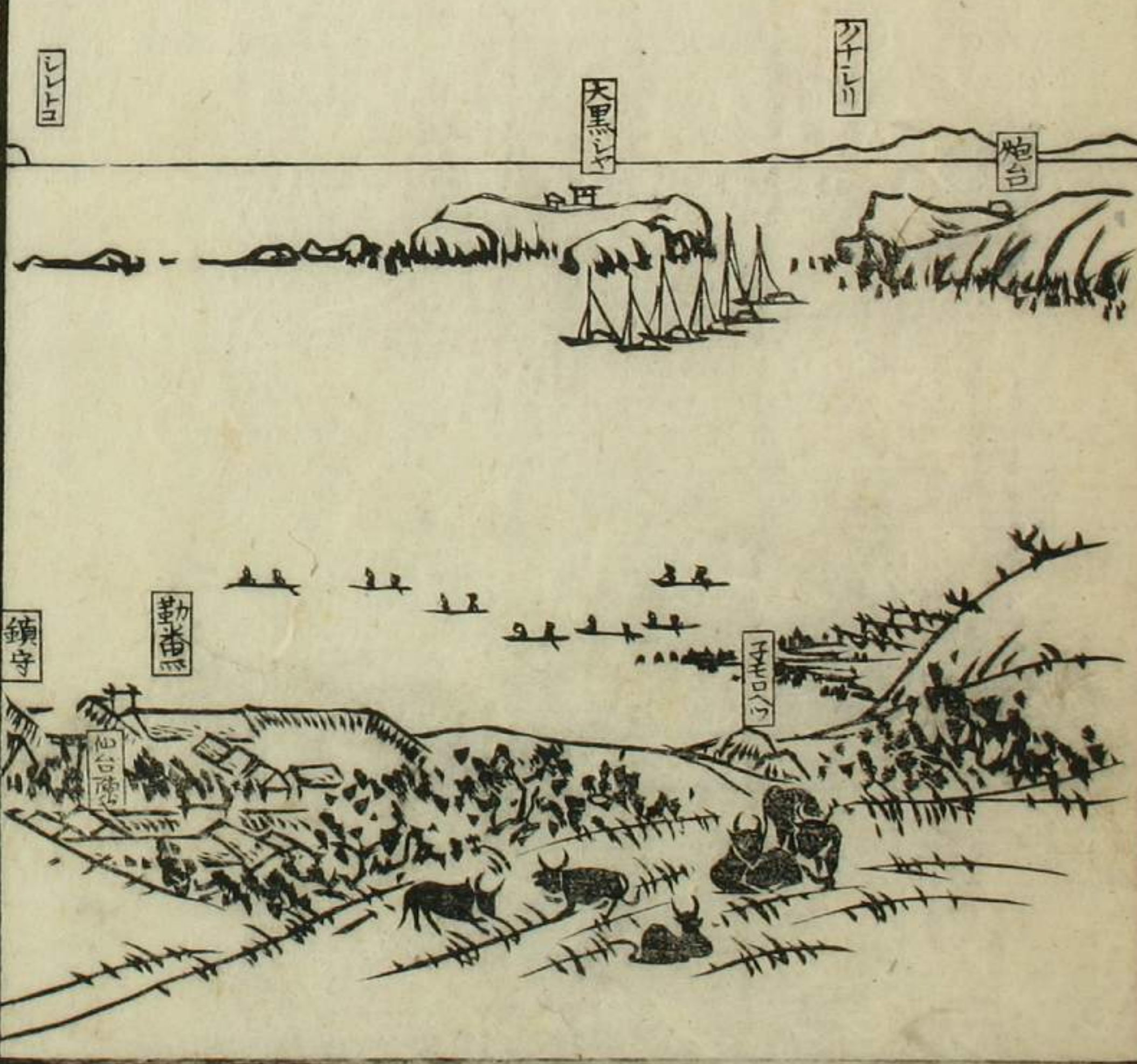


自
園

道

子

丑



山

山

山

山

鎮

勤

山

山

政礼の時より何れに始り居るや如く山形とて都府をなす所の綱の
 中におのぼり居る所の計果とて今より一端に過ぎぬ者を知りて
 厚るよりヲツキ二階イコトイキと候し追討使のありては叛賊とて子らげ
 故に和人と神國とせしめり候とて今よりの徳御河りありては道て
 トコロニテコルウシヨク名義候てはコタヌカ川 考を 村に 名義候
 人ありて今サキハイ一山ありて候しはコイトイイ人連承り候し
 メナレオセの川と南原と名し源を子岳と名し大なる瀑あり
 派てモウセウレハ 考 藤原 麻多岐之シルトウシ平とて谷地有と水平と通
 満級と号しくコロクニウシ平 欽を多きとて今より 平
 クン子ヘツ 考 藤原 平川と名し又川心あり

メナレオセの川と源を大岳と名し今より 温泉と名し今より 平の下の通とて

るてホシユタン州ホ日コタンケレ州よりミイ河平の下の通とて

サキハイ 小川 考 藤原 藤原 藤原の各とて小川平あり人ありて七

ヶ所の内よりイシヤマニヒラ 平 藤原 平と名し地を神々候

取れり候とて今よりコナラニテウナイ州西原の時源本あり候とてホロコ

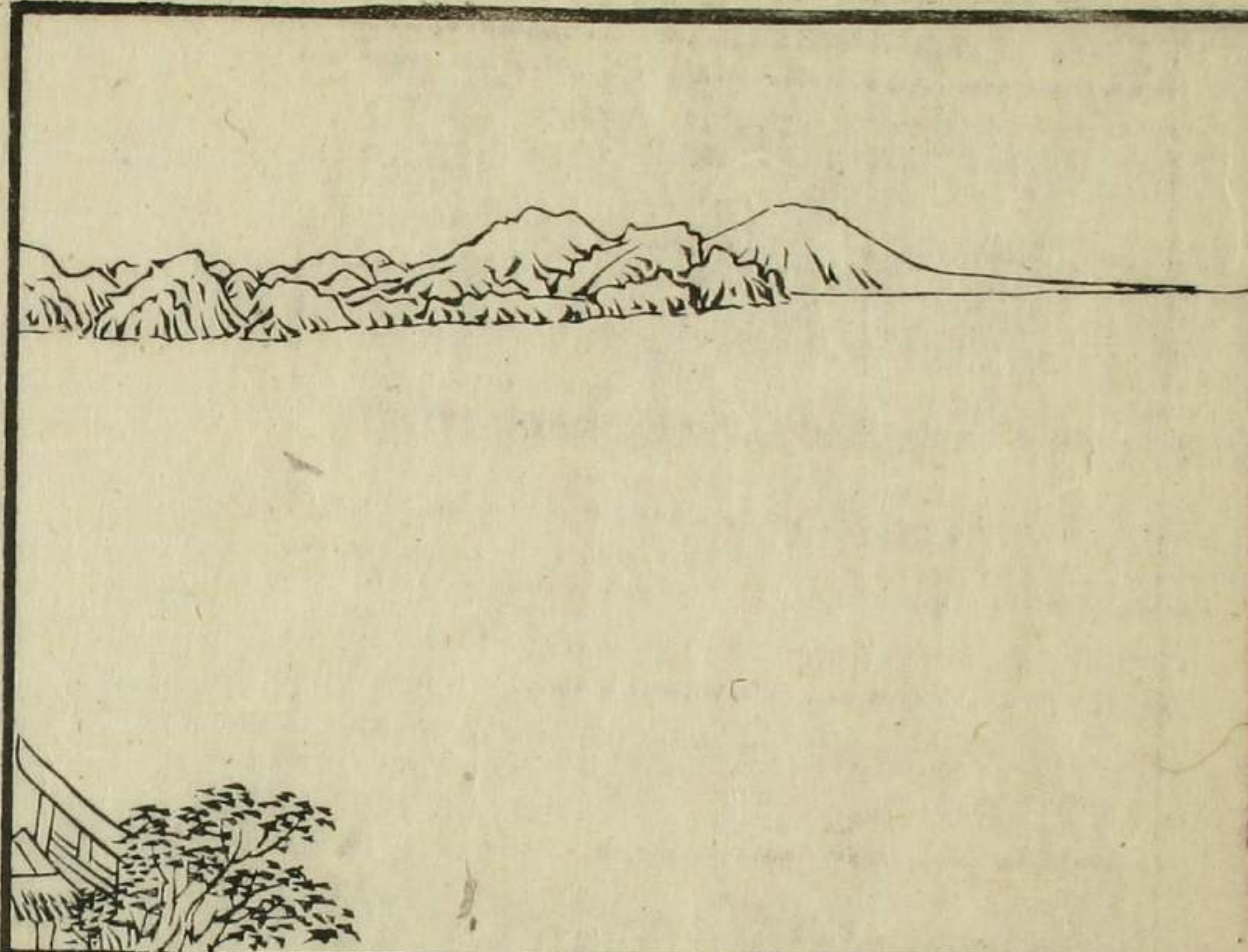
ニチウナイ州ウエンヘツ 村 考 藤原 藤原と名し夜西海ありて

今より今引揚り候とて依て西川の各あり今より人ありて

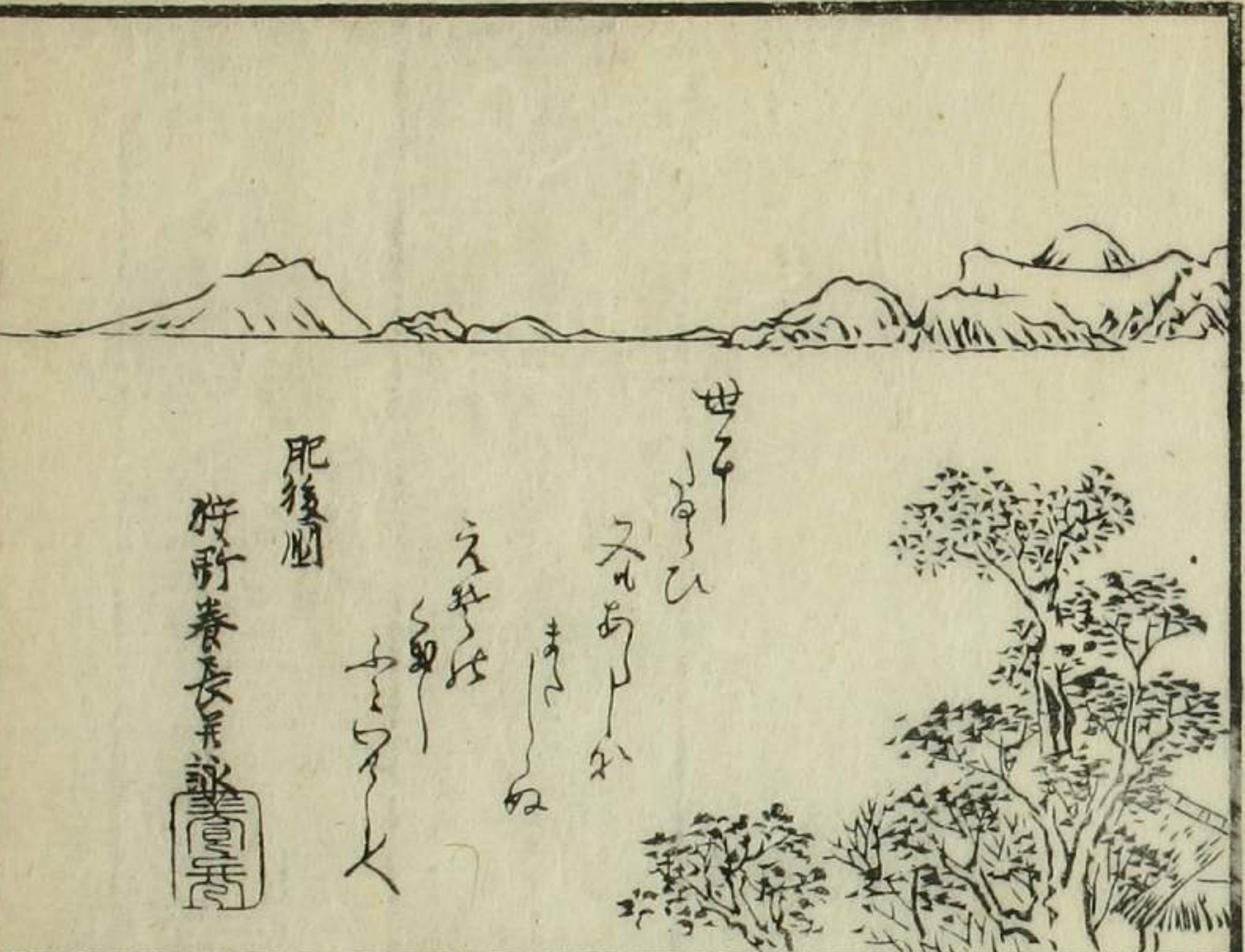
メナレオセの川と源を大岳と名し今より 温泉と名し今より 平の下の通とて

今より今引揚り候とて依て西川の各あり今より人ありて

ヨコマフ 小川 考 藤原 藤原 藤原の各とて小川平あり人ありて七

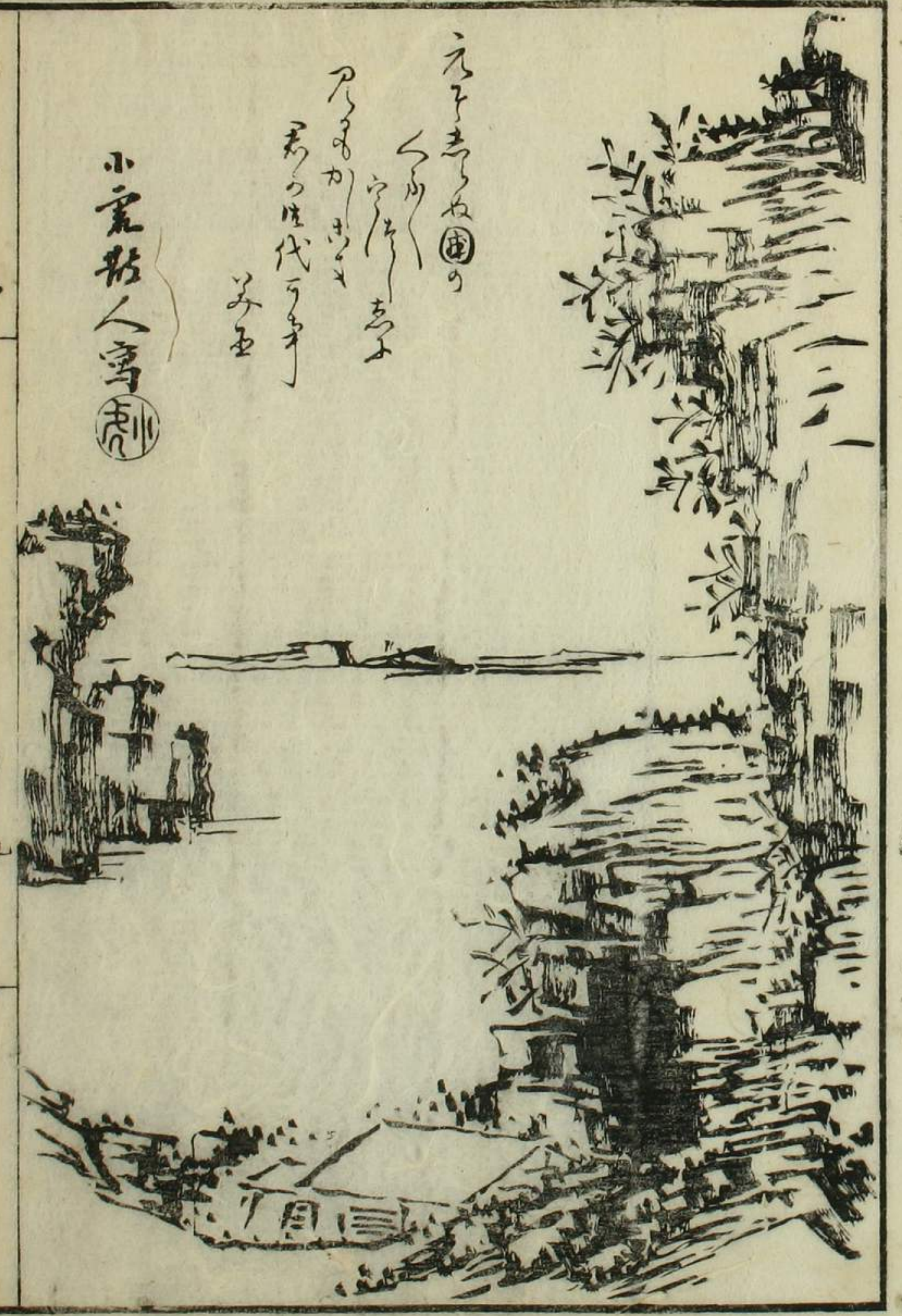


山をたれをたれとて云ふは云ふを
 以て連し一乙名アキヨ 空かしく宿をよま
 鎮まはれはよまれをクナレリ一日
 乃ん元 角宿星をまはりよまはく群
 花をれをまはりあはれをまはり
 帳寺の御羽うまきまはれ越り此
 たけまはれをりよまはれ
 曾好是は度なるをまはり大なるを
 より新く依り舟を備へて波を浪風
 帆板とてまはり海を渡るをまはり



山を全形を現し 山勢をたれとて
 山をたれとてまはりまはりまはり
 東南向頗る土地をまはりまはり
 山岳クテリレハツ岳チセ子岳ウナハツ
 ラン子ヘツ サリキウレ イミキ岳レ
 ヤマツ岳祖又岳祖生岳ま風景目
 山岳まはりまはりルウクレナイ川
 川流まはりたエキレヤラレ岳祖
 父岳まはりまはり山岳まはり城
 山と依りまはりまはり

モルウクレハツ川はもと城ニ軍ハシ海軍の念能疎チ又、レ志神
 重宝住放持本幣と奉ヒ是カモイナセカモイナセカモイナセカモイナセカモイナセ
 有沢の産を以テ土器瓦石等物出ラシソウラニハツ海瀧尾川
 土器をリイホコマナイ川名有ハシホロムイ大ケトシヒラニ
 少人等廉を以テ纒糸等ハ軽小舟依テ早くレユニカルコダニ油取
 水と多クタクツ子フ川様多く有テタツカルウシ考を海操も多ク
 千ノ川等々ト海鏡も多ク中ノ志々々バ人ト海月等々共園ト
 人ト中ノ物々人ト人ト愛々廉等々又鎌千込ラ一面ニ群ト
 有々海上一面もも多クハシ共大ナルと云々ヨシヤンヤンヤ子
 レユマ大根細く末々ニエ斗ノ矢定有テ依テ早くクハシ
 ナラ



元子志々々丸
 ナリカ
 長代の
 五五

小宮村人等

チニレバツ 考を五株小川 本名チフニウシハツ船材多し其考し神
 船を能く ラウレ権尻の 故ありやマツノイハ川を何と云ふも業考し
 多しホニマツノイハワタラ岬ソレケイ乎此所両岬ノ石層崩
 故よりくし香く来りや風起涛をきき故に岸に船を寄来り
 レフシラ、岩 沖に暗礁有故にホロムイ澳フウレハ概多し此は是
 内地の概と相違ありド、漢石温杉土柱鳳尾松等のや岬と云ふ
 ラウレハ考し コライレ 庶然とあり必きまを居り故に職病骨有りとの説
 上は歴々岳と云神重者ま岳と林兼温ありとてイコ又レマイ大
 考と云ふも マカヨ やま岩有とマカウレハ マカヨ 蕨草をまき或は船をナリ年過
 チトラエ 小川考を二株 又風波荒き故に陸をいふ番や岬と云ふ



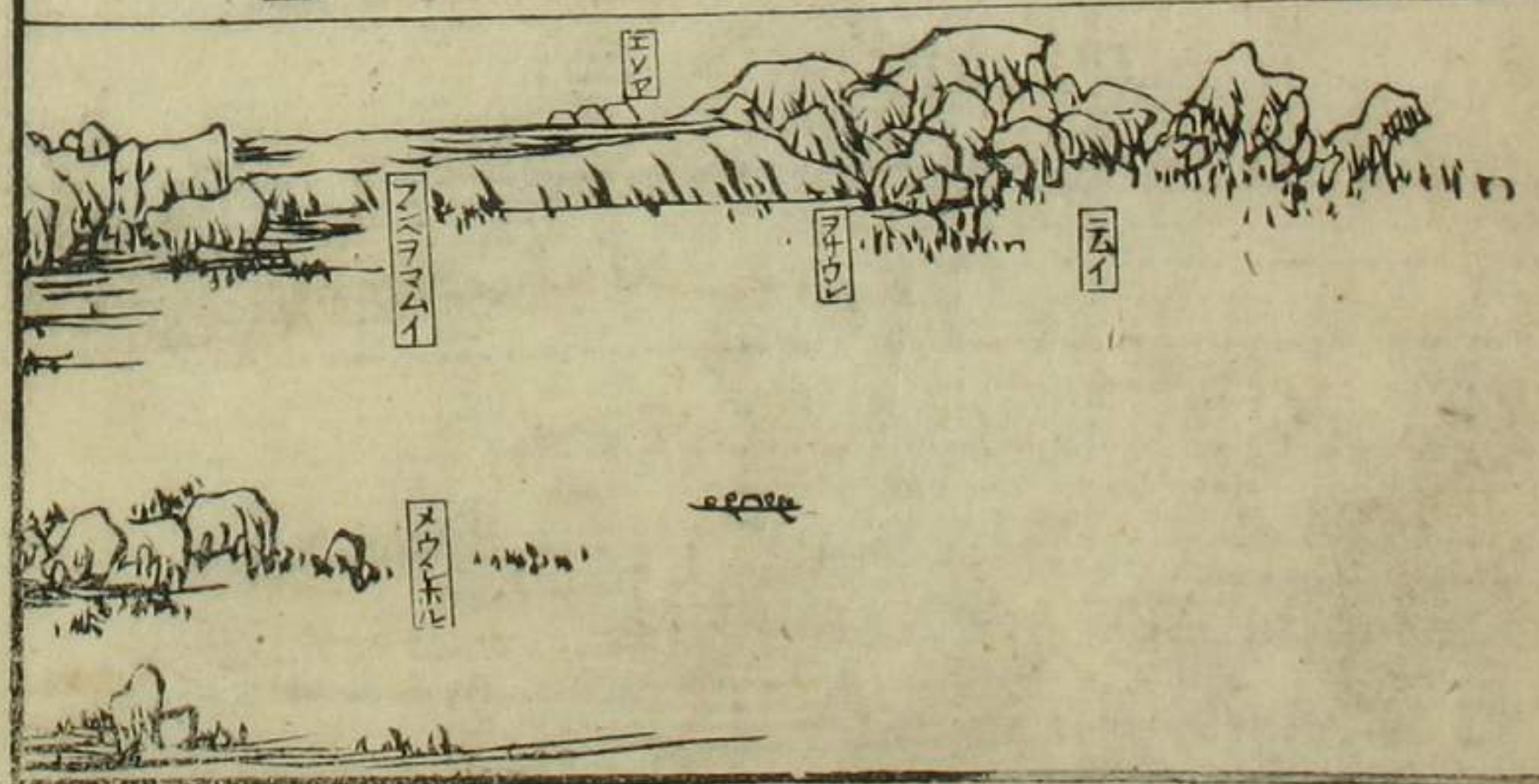
男子為奇是は
 難尋常物本笑
 某冥風室城下
 昇平日展見
 夷絶險山
 白波秋日在東
 雲夕冥樓題
 雲如

大石の岩の方々の一室を以て岩屋は岩屋洞窟岩屋橋草紅白と橋
 峯よりを青い夕の空の下のあふふかき雲の影をたぐひて
 仮寐をこころのあふふ石小波草の岩屋とてこころは花也
 花散る岩屋の記一室の相を更なる我より岩屋に於て一室の骨を
 能くあふふりくるとるを多しといふお寂しき花也といふ
 五日源明登舟の納めりて橋大なるくナシリ島の手より取
 斗より人の岩屋は海にチカフユエキウレ大鳥取の云々ありりイレマ
 石高岩凡五斗を乗るくくろくあふふ其の中より人列り水もあふ
 照り散る思ふも活漕の橋もあふふとる。レユマテ七岩此ふよ
 大岩屋にららハレコエツ川は川流は石曲る何れを難き異亦あふふ

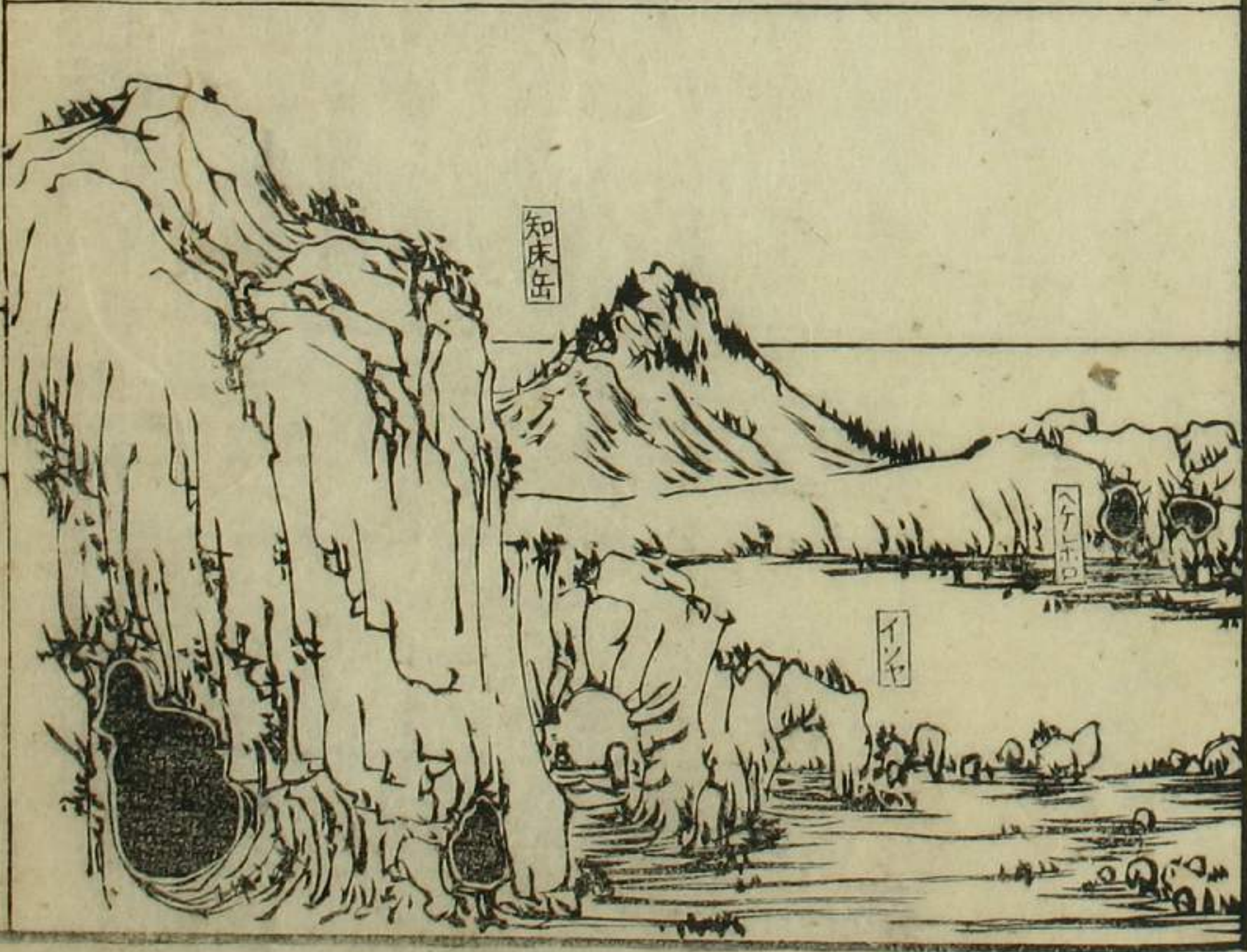
早くと恨くはそふも人さるをやめてトヘニツ川は松前とて云イタヤと
 常盤楓の野藪楓の枝の漢名椒樹なるを思ひのサレルイ川
 砥石有る故にまうくエンルン岬トノヌカルウレ岬岬此ふよと月
 和を見えり故にまうくヲチカバケ川川兩岸城とて岩屋のふの川は
 標の如き意をあらうなる月くチエツフシへツ川は多き意にチエツフシヤ
 クへツ川は真を故にまうくモウセカルへツ川は真林取川のふクアマナイ川は
 伏しのふキリへツ川は故にまうく川のふ大岩岬ありて
 ルレヤ小川大岬なるルレヤニとて思ふも又ルは路レヤ
 せシヤクもてあふふ先を此岩屋に於て一室を以て難き故にまうく
 又まう西地のルレヤは雲の城なる一室にフウレ川はランコウレ川は相前とて

去つての承りて故号く此水何と云ふ
 和名抄に因て桂一名櫻計優言と云ふ肉
 桂一名櫻又楓一名楓風機中書
 古多記に傷伴楓と山王耀天記
 揚祝中々天書卷一藤原又大杜
 揚祝訓と云ふ何れも是かん道と云
 シヨロマウ磁磁磁磁磁我経々此亦
 鱈の流寄りしと切て蓮の串刺し焼
 若く山 時々串折とて火の中焼
 やら登きしゆの尻條突るゆいと云ふ

雪路水
 程豈
 易
 行乗持
 履揮
 一
 身輕知
 君鐵
 膽
 大干斗
 堪比
 當
 年投筆
 生
 強堂壹
 五十四



事ら多てトカリムイトカリ水水約約湾湾あり
 チヤラセナイハカモイヲ、ハツハ態態あり
 川川かりリイウエンレリ小島島ウエナキ平
 若く石岸山山人人成成控控を控控て
 傷傷ききチヤレチヤレ傷傷りり傷傷ててききくくモ工
 レウレレウレ破破へケレへケレ少少甲甲以以まま紳紳ととまま成成く
 メウレホルメウレホル洞洞日陰の洞の多クチヤコ
 タシ崖崖大大なる奇岩重なりニカルウシ
 小水伐小水伐より多き我我の室室は瀑瀑帯帯ニ條
 多多ひひててるる風景頗頗る所所之之レ子子レユ



ノエト小樽を燃るゑ其雨多申く是うくキナウレ候
出居風の如き
出居下よ二五五... 岩礫者よよホル
ヤウヤ破平よよ子モ只木の境は
土地愈峻岩中より青なりへケレホ口
明な故よようくフンベラマムイ
荒れ流るゑ餘は此河よよ故よよ
街好故よよ...
ニライ候よよは大岩智成
ウレ候則し亦を辨レシトコ
と鳴る物寂寂よよの岩は
此の候

小樽草陸はライハリキナチキトコマイマキトク
若磁器の破れを焼くは
云々思ひてムイ候
定らる神靈志よよ由
岩海嶺山の茂は海嶺
や否海嶺網目韋鹿
と相寄る故よよ海馬
美園をれを故よよ海嶺
浪枕よよ...
此處新築を未しと思ふ
此

水豹 ツーカーリ トカリと 汎。

南華進人 南華

其あふりよくとくもシトカラをいふ
オーとー 第一ルヲ、第二アムレベ
第五ホキリ まぐさイツ 第五ハカトロウシ
又ヘケレと云 是よ次よのシブイ
又レタレと云 ケレヨー ウフイツカリを録
格と有ると坊あ依格の
奇ふと出と響と唯あ一又
ある西と依とまると多し 根法



石滑 スレケレ 久留田の品なり 余れ是よ云
あるソウヤナシ是よ次ハ極美地の
産油ありと云ナリ 比是を所料也
と云くは及リぬ 官定價と云
取納る扱モナリ

たけは是等の物にして其のむす
用ひる者銀口佛師運度
佛工料よむと云ナリ 官定中徑
水豹皮立子板き

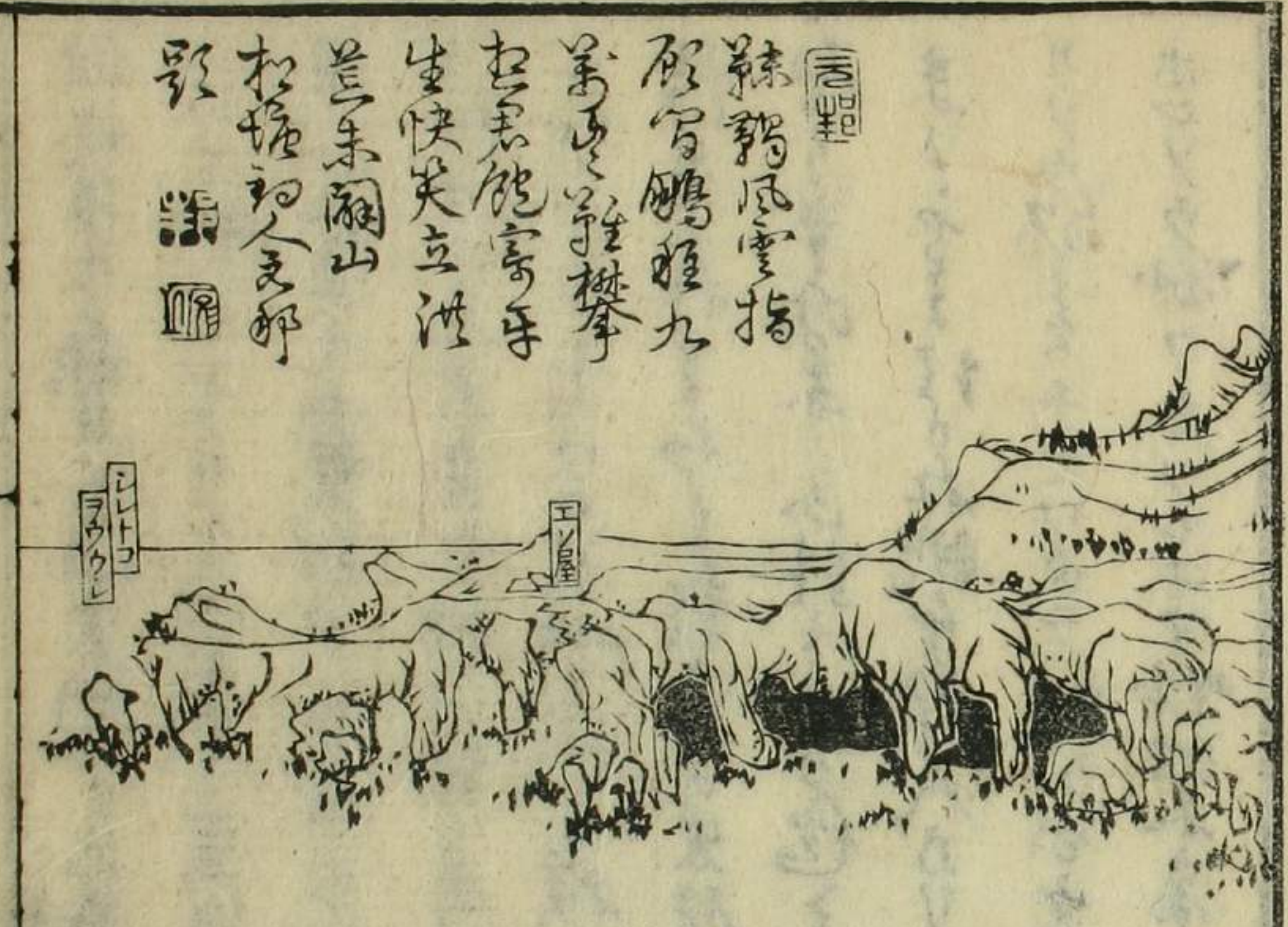


夕方より金鳥の影かきクナレリエトロの山より輝きよき取平より
 くれし一首を文敷き小使カラリケ此小使の家に入るを乞ひ泊りぬ
 宗かおれしよき取平見くより衣巻珍を飛とらふ
 六の松トウハレ剛オノアト雨そり根指の突人を伴トノシレ一葉のふ使を頼と近平より
 数舟岬をさすやノナシタアムイトウ岩洞ニツ方をも奥深しカムイチ
 せしよきよす入る浪の音怪も枝尾松と吹也ホラ一タカシヤラ
 二岩イチロウレ岬水中よるもあそびてレユンタムイトウ西海と
 のえくタン子レラリトウ長岩と隈まチン子ハレクロホルトウ大なる
 鳥の洞ホラのえ此中流る鳥とくエトロより渡来し鳥あそぶ葉成りしを
 鳴きキヤアくと鳴る地物と美しきウエンヒロタウレ岬岩の岩洞あり

クレヤラキウレ門ワツカエワタラトウ水満産のえ此を味多し一
 權と過る白まある角よす破もんりをかモイエバトウ怪岩トウ根指の頭の
 やくはよるよま愛又一ツの芳指も毎慶の妹シママイりもあはれしよきよ
 吾人し矢槍のあがりし毎慶流流し中より化して岩とぬししを時傍
 五種の神トウよきよあがりしをトウ則此五種の岩とく今アキ子レユ
 マユトウとて方ありヲラウレヲハエト岬キヤルマイ門毎慶妹大館より遊
 り遊来りし穴より取指ししを上をヲファイ岳より知承岳より義経オキナ
 様けし軍勢よあがりし時傍をよきよあがりしヲファイの境トウよきよホロ
 ムイトウ大よホロムイ岳よりホロソウトウ岬よりイマニツウレトウ志事よきよ澤く
 け不柱をよきよあがりし義経よきよ中より刺て境を越しけしよきよあがりし



化をいふ所のアルテエンルン岬
 下大岩洞之奥を知る者あり大
 うす幅幅修す物部最上寺地は
 棒の焼く五つありて幅幅
 火と焼く入新と棒火多焼
 十余方今幅幅もせ火一暗
 又洞一とて所家氏の言はけ
 洞は^{ヤチタノ}神住改修も入るる
 と成りまありとありては是は陰
 石の為幅幅も住むる所なり



竊驚風雲指
 野官鶴雛丸
 兼少之難榊拳
 起君能寄手
 生快笑立注
 其来嗣山
 松嶺初人支那
 歌謡

竹さくもそ村に在り故に新し
 多林ありまゝにありて古居を井並
 乃々死せる者有是陰ありて
 乃々物とてそを試する火の焼く
 ありてさくものありて尤溪縣龍
 門山高聳千餘丈有洞口僅四尺深
 邃莫測石竇滴水如雨有蝙蝠大
 如鴉撲人面不可入全誌とまも物
 ありてホニアフンルイ岬ヲニ子アフ
 ンルイ岬湾の西よ砂濱を海に連

時山常を級与く山岩洞を石燕ベシキもくまし石撞乳一雪垂りホ
シムイ海ニレトコトナシやまを岩に里くそより西の方を結色を
帯い山岳も五嶽和らふ優美のホロエンル岬カルマイクシ社在る
ヲキナト云大矣と神々鈴りい依てさうと前トレユマ石二山を
主眼にイタレベワタラ岬依て枝をなす石く愛日一條の流り
懐柔なれらるわく教十田の忠節を掛さる又愛者をさるわく山
壁をさるる系 山峯をさるる道とてなすわく五嶽和爾園 谷をく
まらさるる垣めれ眺中つる人力りーウチセ岬前より一ツの岩岨方モシ
リソウ岬と云チセワタラ ス。 家定と云ヌフウレソウ岬赤流と云ヌ
ホシソウ岬ヲキツレユマ 岬 岬が不意な丈中を上る細く松茸の如

くまらるる山岩を風波を愛し時山の様く 依て長く是と云ふフウレシ
レエト岬和岬鼻と云ふアツトヒラウレヘツ山海面より川と云ヌワシロ
岬レヨウランヘツ大流を川の長此三つ何れも流る海の中をさる
ブイ岬岬岬和岬和岬の形をさる岬がカハラヲハタラ岬ハレユ二岬也
名を和岬と云チヤラセホロ 岬大なり岩洞のあゝ瀑布を好む湯ののしと
中に入らばと云き源長共の住する草屋山の山麓洞の如しと思ふく
陸地にやみ深く見れば和岬を好む船を停て眺中をさる燕流を漂
浸る歳若干あゝ花出たホロソウ岬是流を一線と云ふ下りに
流る如く海に入らば岬岬岬岬の如く水洞を好む岬を好む我々の
衣服を浸らば又岬岬と云カモイコタンと云ふ一ツの岬岬神靈をかく二ツの

穴を一つ空風を噴き一つは暖風を生じ捲き一つは冷く一つは深き
 深きより及く空風を暖風を噴き息の頭を擧げると深き
 チヤラセホロ岳と云高き山はホロワタラ^大ホロレユマエンルン岬^岬ウエンヘシ
 コケウエウレ^註生考法神の時^註不^註棘を^註追^註去^註を^註来^註り^註と^註云^註故^註る^註り
 ウハレムイ^小山^註消^註在^註四^註時^註も^註雪^註方^註の^註故^註号^註く^註ホ^註ン^註エ^註ラ^註ロ^註シ^註岬^註ホ^註ロ^註エ
 フロウレ^岬岬^註号^註と^註云^註り^註如^註き^註岩^註海^註中^註の^註突^註出^註を^註チヤラセ^註フ^註イ^註岬^註ヘ^註ケ^註レ
^岬明^註と^註云^註り^註又^註チヤカ^註ハ^註イ^註岬^註ト^註ント^註ル^註ハ^註ウ^註レ^註年^註計^註不^註芳^註一^註我^註海^註を
 網^註と^註云^註り^註如^註き^註好^註る^註も^註是^註を^註蹴^註く^註山^註く^註チヤカ^註ヲ^註ハ^註ニ^註子^註供^註り
 空^註海^註と^註云^註り^註故^註る^註も^註レ^註ツ^註パ^註シ^註ヘ^註ツ^註岬^註大^註け^註岬^註レ^註ト^註コ^註り^註第^註三^註番^註同^註故
 け^註名^註も^註云^註り^註也^註未^註申^註ラ^註シ^註ム^註ク^註レ^註エ^註ト^註と^註始^註て^註見^註る^註け^註は^註沙^註路^註を^註意^註す

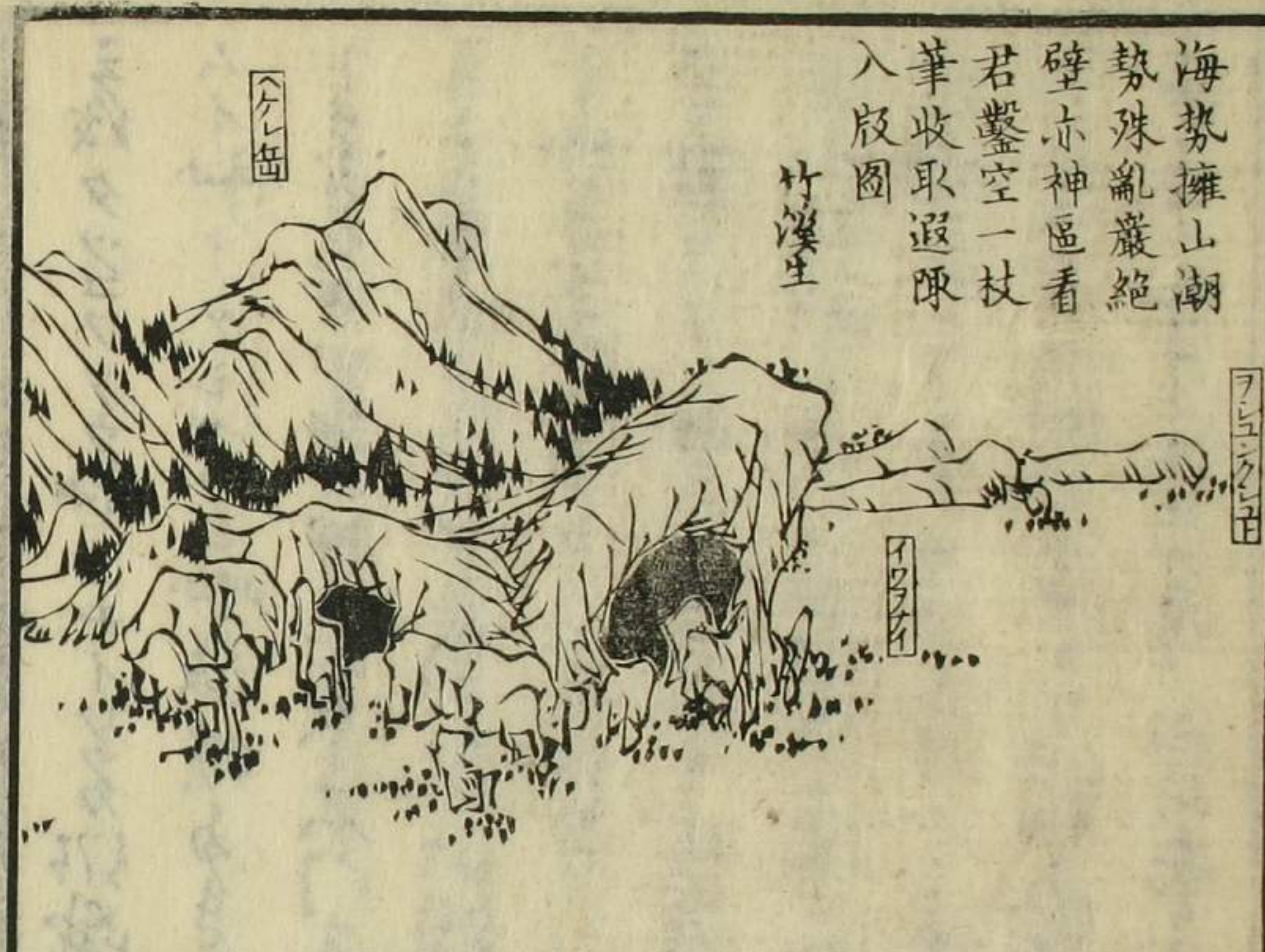
舟楫船と一撥くの舟は法度な一河出船に流るる
 ルレヤ^二年^註余^註の^註年^註後^註レ^註ト^註コ^註り^註は^註不^註子^註モ^註ロ^註の^註ル^註レ^註ヤ^註と^註向^註と^註云^註り^註ル^註レ
 ヤ岳と云并西南にチヤク岳祖と云多し此道并一の高山をれを以て
 と冠ししは是もクナレリも有るれは島中一の高岳なりをヤ
 レヨレヨ小ブンカラウレ小輪は作る木もなほく是橋樑樵
 と云む如くコクワと云木有ぬ号く土人湯を向け枝を切り水を吸ふ
 是甘味も實もけ能く水腫を治す方其法國も其方と如く
 是續断藤山行湯則断取汁飲之號曰東風葉^{太平寰宇記}廣州信安縣條^了合水藤
 本州涼口藤^廣東^註新語^註諾^註藤^註齊^註民^註要^註術^註水^註藤^註同^註因^註物^註不^註云^註り^註切^註是^註吹^註と^註教^註文
 の是息通と土人け枝の水を晒して以て火を附して用也^久指^註カ^註希^註て^註ト

マラマヘツ州延胡堂の河の流くホンベツ州シラリヤ嶽シエフンヘツ州桃
花集あきなふフウレノツ岬^{ハマナカ}イルトカシ^{ハマナカ}マウウレナイ州玫瑰あり
川の流くシエウラヘツ州ユワラヘツ嶽^{イワラフホリ}黄川の儀^{イワラフホリ}シエウラ^{イワラフホリ}嶽^{イワラフホリ}黄^{イワラフホリ}岳^{イワラフホリ}あり
たきま^{イワラフホリ}此まの山^{イワラフホリ}名^{イワラフホリ}嶽^{イワラフホリ}黄^{イワラフホリ}の^{イワラフホリ}深^{イワラフホリ}く^{イワラフホリ}白^{イワラフホリ}く^{イワラフホリ}成^{イワラフホリ}す^{イワラフホリ}赤^{イワラフホリ}く^{イワラフホリ}深^{イワラフホリ}じ^{イワラフホリ}仰^{イワラフホリ}向^{イワラフホリ}
山腹^{イワラフホリ}に^{イワラフホリ}硫^{イワラフホリ}黄^{イワラフホリ}煙^{イワラフホリ}出^{イワラフホリ}里^{イワラフホリ}烟^{イワラフホリ}中^{イワラフホリ}天^{イワラフホリ}に^{イワラフホリ}漲^{イワラフホリ}る^{イワラフホリ}霧^{イワラフホリ}の^{イワラフホリ}毒^{イワラフホリ}一時^{イワラフホリ}車^{イワラフホリ}以^{イワラフホリ}て^{イワラフホリ}山^{イワラフホリ}岳^{イワラフホリ}
鳴^{イワラフホリ}動^{イワラフホリ}危^{イワラフホリ}嶺^{イワラフホリ}と^{イワラフホリ}形^{イワラフホリ}一^{イワラフホリ}実^{イワラフホリ}と^{イワラフホリ}お^{イワラフホリ}お^{イワラフホリ}思^{イワラフホリ}ふ^{イワラフホリ}又^{イワラフホリ}そ^{イワラフホリ}り^{イワラフホリ}山^{イワラフホリ}名^{イワラフホリ}嶽^{イワラフホリ}何^{イワラフホリ}ひ^{イワラフホリ}行^{イワラフホリ}ル^{イワラフホリ}ウ
サ^{イワラフホリ}ン^{イワラフホリ}ベ^{イワラフホリ}ツ^{イワラフホリ}嶽^{イワラフホリ}路^{イワラフホリ}下^{イワラフホリ}河^{イワラフホリ}と^{イワラフホリ}流^{イワラフホリ}く^{イワラフホリ}山^{イワラフホリ}名^{イワラフホリ}嶽^{イワラフホリ}の^{イワラフホリ}流^{イワラフホリ}と^{イワラフホリ}若^{イワラフホリ}く^{イワラフホリ}モ^{イワラフホリ}ロ^{イワラフホリ}小^{イワラフホリ}入^{イワラフホリ}流^{イワラフホリ}と^{イワラフホリ}流^{イワラフホリ}す
此^{イワラフホリ}河^{イワラフホリ}の^{イワラフホリ}流^{イワラフホリ}る^{イワラフホリ}河^{イワラフホリ}名^{イワラフホリ}嶽^{イワラフホリ}の^{イワラフホリ}流^{イワラフホリ}と^{イワラフホリ}是^{イワラフホリ}と^{イワラフホリ}ト^{イワラフホリ}ヌ^{イワラフホリ}ウ^{イワラフホリ}ヘ^{イワラフホリ}ツ^{イワラフホリ}ニ^{イワラフホリ}ト^{イワラフホリ}云^{イワラフホリ}ヨ^{イワラフホリ}ウ
コ^{イワラフホリ}ウ^{イワラフホリ}レ^{イワラフホリ}ヘ^{イワラフホリ}ツ^{イワラフホリ}ホ^{イワラフホリ}礁^{イワラフホリ}此^{イワラフホリ}河^{イワラフホリ}名^{イワラフホリ}嶽^{イワラフホリ}の^{イワラフホリ}流^{イワラフホリ}と^{イワラフホリ}是^{イワラフホリ}と^{イワラフホリ}ト^{イワラフホリ}ヌ^{イワラフホリ}ウ^{イワラフホリ}ヘ^{イワラフホリ}ツ^{イワラフホリ}ニ^{イワラフホリ}ト^{イワラフホリ}云^{イワラフホリ}ヨ^{イワラフホリ}ウ
コ^{イワラフホリ}ウ^{イワラフホリ}レ^{イワラフホリ}ヘ^{イワラフホリ}ツ^{イワラフホリ}ホ^{イワラフホリ}礁^{イワラフホリ}此^{イワラフホリ}河^{イワラフホリ}名^{イワラフホリ}嶽^{イワラフホリ}の^{イワラフホリ}流^{イワラフホリ}と^{イワラフホリ}是^{イワラフホリ}と^{イワラフホリ}ト^{イワラフホリ}ヌ^{イワラフホリ}ウ^{イワラフホリ}ヘ^{イワラフホリ}ツ^{イワラフホリ}ニ^{イワラフホリ}ト^{イワラフホリ}云^{イワラフホリ}ヨ^{イワラフホリ}ウ
コ^{イワラフホリ}ウ^{イワラフホリ}レ^{イワラフホリ}ヘ^{イワラフホリ}ツ^{イワラフホリ}ホ^{イワラフホリ}礁^{イワラフホリ}此^{イワラフホリ}河^{イワラフホリ}名^{イワラフホリ}嶽^{イワラフホリ}の^{イワラフホリ}流^{イワラフホリ}と^{イワラフホリ}是^{イワラフホリ}と^{イワラフホリ}ト^{イワラフホリ}ヌ^{イワラフホリ}ウ^{イワラフホリ}ヘ^{イワラフホリ}ツ^{イワラフホリ}ニ^{イワラフホリ}ト^{イワラフホリ}云^{イワラフホリ}ヨ^{イワラフホリ}ウ
コ^{イワラフホリ}ウ^{イワラフホリ}レ^{イワラフホリ}ヘ^{イワラフホリ}ツ^{イワラフホリ}ホ^{イワラフホリ}礁^{イワラフホリ}此^{イワラフホリ}河^{イワラフホリ}名^{イワラフホリ}嶽^{イワラフホリ}の^{イワラフホリ}流^{イワラフホリ}と^{イワラフホリ}是^{イワラフホリ}と^{イワラフホリ}ト^{イワラフホリ}ヌ^{イワラフホリ}ウ^{イワラフホリ}ヘ^{イワラフホリ}ツ^{イワラフホリ}ニ^{イワラフホリ}ト^{イワラフホリ}云^{イワラフホリ}ヨ^{イワラフホリ}ウ

之^セ流^セタ^セツ^セコ^セラ^セツ^セウ^セ州^セカ^セモ^セイ^セワ^セツ^セカ^セは^セ嶽^セ中^セを^セ流^セす^セ温^セ室^セの^セ流^セと^セ并^セく^セエ^セヤ^セラ
ム^セイ^セ嶽^セイ^セタ^セレ^セベ^セウ^セニ^セ嶽^セ流^セ積^セ多^セき^セく^セ故^セを^セく^セテ^セレ^セト^セ嶽^セ沙^セ急^セき^セ嶽^セ
この^セ流^セ是^セ丹^セ室^セ嶽^セの^セ岬^セと^セ交^セる^セ石^セ門^セの^セ傍^セに^セ山^セ洞^セあり^セ主^セ中^セに^セカ^セウ^セリ^セ
き^セる^セ水^セの^セ流^セる^セ中^セ小^セ鴨^セの^セ如^セく^セ川^セ洞^セ中^セに^セ窠^セあり^セ此^セ河^セを^セ穿^セつ^セの^セは^セ群^セ衆^セ
その他^セ一^セ定^セと^セ思^セは^セる^セも^セあ^セり^セ一^セ考^セは^セる^セも^セあ^セり^セ一^セ考^セは^セる^セも^セあ^セり^セ一^セ考^セは^セる^セも^セあ^セり^セ
書^セ載^セせ^セり^セ此^セ等^セ流^セ土^セ人^セと^セ血^セ通^セる^セ某^セこ^セと^セ云^セは^セる^セ一^セ考^セは^セる^セも^セあ^セり^セ
山人^セ嶽^セ名^セ嶽^セは^セ何^セれ^セも^セ九^セつ^セと^セ一^セ考^セは^セる^セも^セあ^セり^セ
中^セ流^セに^セれ^セり^セこ^セを^セフ^セク^セレ^セヤ^セウ^セレ^セタ^セツ^セコ^セフ^セ嶽^セ芒^セ葱^セも^セあ^セる^セ小^セ山^セに^セも^セあ^セる^セ
ク^セレ^セヤ^セウ^セレ^セノ^セツ^セ嶽^セイ^セワ^セヲ^セヘ^セツ^セ中^セ水^セ源^セ硫^セ黄^セ嶽^セも^セあ^セる^セ故^セを^セく^セテ^セレ^セト^セ嶽^セ流^セ急^セき^セ嶽^セ
山^セの^セ右^セチ^セ子^セ岳^セたり^セ祖^セ父^セ岳^セも^セあ^セる^セ根^セ流^セの^セラ^セウ^セレ^セは^セ嶽^セと^セ一^セ考^セは^セる^セも^セあ^セり

海勢擁山潮
勢殊亂巖絶
壁亦神區看
君鑿空一杖
華收取遐陬
入版圖

竹溪生



行進如之室人の五鬣松匍匐し
甚上九斗の一面硫黄山と燈
出さるる方海をきよの上と道は来
少敷塊をぬき入り、頗る上あり
同人の話より谷は硫黄を切り万人
二万人の人投を入り、五の拾ひ、事
可ふありとわ人の身は我の如く玉
人への時、取来り、梓と云ふ説種と
主傍り又大なる洞と云ふ名を以
て、長さ七斗位と二段三段と成り



石法^{トのイ}卒^{ハヤ}ありと云ふ又一種^{チタニニ}石法^{ハヤ}ありと云ふは他^{ハヤ}と見ざる物也余
津軽と見ざるは皮を剥き湯と
味^{ハヤ}は肉皮の水具の如く透明と
味^{ハヤ}は清く味^{ハヤ}は是を孫^{ハヤ}は味^{ハヤ}
又又と云ふは感^{ハヤ}して三斗年と云ふ用也
又又と云ふ津軽南部と云ふ石法^{ハヤ}卒と
梅干と云ふは梅干の味^{ハヤ}
字^{ハヤ}梅干は梅干の味^{ハヤ}は梅干の味^{ハヤ}
と味^{ハヤ}は梅干の味^{ハヤ}は梅干の味^{ハヤ}

山形日誌

三

清と書て江大郎と題す郎もまはる物中を記すと梅干と心得る
或るは好くやあるその美味と書くと再び郎もまはる物中を記すと
又其のついで中を記すと

山中物 海に浮るのり多旅も馴れし心やとて
七日收時イワラナイノツ岬大岩洞ニツ方是より舟と撥入る石藪由
小舟者記す輟新録とて遊の事方ふらば書かざる由書載せ
たりと書くはま本と書くは審といつてレトコ岬の水面を
岩洞より舟を遊もなる書の事也 南面なる遊を記す書の事也
如くはなる解新 一ホロヒナイ岬大石沢と記すホロヒエマエシル岬イ
レカリムイ岬行舟の事也遊岩壁下及書くは岩面小穴多しなり



温泉涌出を定まりきりて一掌の文を餘程熱し一斗でチカホイ
は愛も二斗見方フレバとて水満は是又孝の一斗とて水の色
液を搦る中雄黄丹朱の氣をかし鉄石方くと思ふフウニ押香
木と灰と若しけふは庫の如く木方りしとて

ホロヘツ川中五つ方水子モロのチニレハツ 前山石城ニツツ方けり今村の
方を死別て可也鉄石方とて 一室未も出風を成り

う放船を内へ入ウエンクシ岬 要方とて出りて伊ッラハツ

ウトルチクシ平後 鉄石 考也 板方有 是は省ふ美岩方と舟越る多うとて遠處の

峨々突元とて鉄石の面をくまをへケレ岳崎と云林麻の亦も水晶茶

ナシキセロ 竹馬州 鉄石方 ツユサエモン とてわく刀とて是温湯の氣とてけし我志す石持

こそ暗葉とて入候せりは習燭とて水は多き物
又海岸の剪股白蒿カモイヤ 多し土人其を抜痛の時常月日地物と
内地の艾ヨモギと思ふ湯を吸ふ者有甚妙又ササハシカイ 葉内地の物と

方此地の物も苦味りしとて土地の異に依て白蒿生荒野中草高二三

尺葉如細絲似初生松針色救荒 本艸 周氏曰白蒿香美可食本艸 此地菊

落種多し一人七粒と勝葉とて少く水豹二頭と捕獲する是と

房と肺の臟とて方土人の多し水豹とて枚板とて移る人をして

るは心附く愛不思儀とてあり

八月朔明登海風浮く竹如砥流り中夜霧中岩磯の石をひてエベル

ヶ併アハツテウレ岬に名をく岬とて人エナヲとておとす

名義釣多る。凡そ岸緑樹法森々不故。主腸多矣。多る故。釣多ると云
 うチエトイウレハ。小虫。土。方。の。多。故。の。云。云。人。を。根。を。多。付。出。せ
 る。人。を。根。の。多。故。の。云。云。由。是。を。釋。は。多。秋。の。虫。を。多。と。云。云。
 識。く。取。り。別。を。康。を。好。く。嗜。く。是。有。涯。土。色。黄。色。群。鳥。飛。來。啄。咀。所
 食。常。陸。凡。と。云。云。物。へ。ケ。レ。ハ。小。虫。の。多。故。チ。ヤ。レ。コ。ツ。エ。ト。岬。路。フ。ン。ベ。マ
 ベ。ツ。川。録。有。川。と。云。云。コ。エ。シ。ヨ。モ。イ。ハ。ウ。カ。ウ。フ。岸。に。不。思。白。の。小。虫。多。く
 採。り。表。す。故。号。く。多。く。エ。シ。ヨ。マ。ラ。マ。ナ。イ。ハ。義。行。の。所。寄。り。の。云。云。
 時。之。席。と。殺。於。り。の。云。云。なる。が。ら。フ。レ。ユ。ン。ク。レ。エ。ト。岬。是。第。五。岬。の。後。小
 橋。桃。チ。フ。レ。ケ。ヲ。口。に。結。け。し。義。行。の。船。破。れ。し。依。り。て。号。く。チ。ヤ。ラ
 セ。ナ。イ。ハ。海。ヲ。へ。ケ。フ。小。虫。の。多。故。の。船。を。破。る。入。沈。ま。る。と。云。云。

無目無口。无骨无截。不飲黄泉。
 不食槁壤。隨沙蠕動。類蠖而
 長。一種海味。謚曰龍腸。

案閩書沙蠶生沙海沙
 中如蚯蚓泉人美謚
 曰龍腸
 平安榕室山本錫夫



尾張小春史寫

漸く汲於船りたりと云々 垢取入るを扱うたり 其の味は
川に取らりてサシクレハ上等の酒有る事多しと評しフレチウレ
此は海産の付フレチと云々の如き物也と云々 依て是れと云々
是を乾くにして腎病に用ひては其の味は腸を毒す所の故に其の
臭物に似れは余是を法を以て審み

武州羽田辺の漁人採りて比日炙と名を賜ふと云々 井と云々 和名は
七葉合経と云々 蝙蝠其貌似蛭而大者也和名は俗用城埭二字是之
平部と云々 余は味を以て之をあり

多氣志樓主人蝦夷産フレチト称ス乾腊ノ品ヲ余ニ贈レリ然レソノ生活ノ
形状ヲ詳ニセサレバ和産充ツヘキ物有ヤ未タ之ヲ精定スルヲ能ハス恐

阿部喜任識

クハウ海蛭、スノ属ナルベレ又ハチリ羽織紐トモト呼フ品有亦此一種ナリ又井或
ハユ又ハアカウト称スルモノハ克ルニ安ナラス 中畧

又洋説ヲ按スルニ此類ヲ蛭アトカマムノ次ニ舉テ「セーウ海蛭」又「セーサントウ
ヲル海砂蛭」ト云ソノ形蛭アトカマムヨリ大ナリ海濱砂中ニ産ス漁師之ヲ捕テ

魚ヲ釣ルサラントス蛭アトカマムノ如ク砂上ニソノ糞アルヲ見テソノ居穴ヲ察シ鐵ノ抄子
ヲ以テ掘出シ貯ヘ用ユ又砂中ヨリ甚タ引出シ難キコアリ是ソノ體ノ管ノ内
ニ在テ大ニ膨脹スレバナリ體ノ形圓長ニシテ太サ一指長サ一尺甚タ粘
滑ニシテ雜腹蘭黄色ノ液ヲ泄出ス此蟲沙ヲ去テ扁桃油ニ浸シ藥用
トナセハ關節痛耳痛ヲ去此類ニ數種アリト云是亦フレチノ種ナルベレ

文久壬戌冬日 錦窠伊藤圭久識於市谷邸舎

余乾勝の物と病者減はる能著一チ子へツ川神急流あり

川筋(通)主源右チ子岳たへケレ岳山あり根法子モロのトレハツ又出

是より新若溪ニクニホロナイ川カさる砂流なる故二月上降して

曳引海面降して面白くマクタイ川カは不若判官様う全我

望れ時暮と張クハリ主源土豊の形も廣くははるこてチクル

ニレ川フレヨマチマフ川上あり絶壁あり方と依て早くチタムイカ

チチカバケ川上は沼あり毎年主源と鴨菜と雁と音る故号とて

チライ子ユタンカホロトマリカノツカチマカ岬カ岬カと云くニユマ

トカリベツ川は不り全利の方な石一ツもさとの儀くと人お濱カ

様と之別さる小貝あり上をせて余の系あり山村ははるまはる故七ハ下

山より級系を用ひカモイチへツ川神方川と云く河漢と云く

ウナへツ川中七八百系は川馬海原は昔を流して美し

あま小字や深ウナへツ岳より来るを深海とて其類柳花英のく

汐金干りぬ舟を遠く海と云く我と上陸して来る砂の層く堤より挽の

ゆき板の如く大湖石或は休茶の像の如く成り挽と云く是テ小

濱のエキコマナイ系と云くも貝ありは是を土人云く赤言チタイタン

キと云く砂粒と見海原の塩土あり砂のきく凍り挽と云くや沈

を乾して綿と砂のふを綿と云く挽の如く成り挽と云く丸と思ふ

と云く丸と云く挽干りぬるふの汐流るはカ小綱カチセ綱カフニベツボ

と云く織りぬる挽ホツキ貝と云くお上るを腰の二系より引く糸流や

尺の糸はく破るも只角の紐の中のアワシを忘ぬ何れも糸とて一
 病入小枝の脚セカチカチチ天機は夕干のあやうらうら我をくえそは
 女男子 女子あまなりたまひをアキラアキラありて女を夜子十六せもありま
 を持命の時をぬれもクナシり高きこれ法國より入来る漢者船の
 為し身の中より取扱られ男を乗せけ放ちてきてて至極のついで
 たり其遠いれもの感と百里外の離れぬとてその好終は屋を業とす
 夢を者多し男女も梓の病なく身とこれ別ぬ病志と向くを働穡の
 けり月には五十年の月も故仰ふ時とるや我新く又夫婦にて彼地
 までくの時ハを又とるまきと漢城をまた命おまきと番をさくを
 番人秘人との慰む者もたむき何れとも陽をまきとるれといかえ

言を月まきとる故は只位の日を送るゆりか如きを送るまきひりてさるりの
 故より別々實政中の砂子餘五五五五五改万四千二新千三百九十人者り
 今を漸く半とありそうとてりけ供もも今をせよとこれと如人の極も
 如の事りゆり語る故友は丈夫の者あまきぬ穡漢を出来新く
 するくの情もさ程さぬ毎に汐の手とゆるとも小貝を拾ひ汐浦来る
 野山入て草の根を掘り喜と人命を殺するゆりともシテ一其情ささ
 くれを我を貯くの種米と新つてから昔も来りやタニ子ウレ地
 けふ長き地をれをきくことバナナ系中の岬をさつて川を入るなり中年志
 ちりり金村運上をたごる一団結守社をりエナチ初りて山海の神
 とあり途中のあとを笑く車を一樽を開き結合守岬氏の漢あはれ

予一由事者其後... 一事同人... 深く心を... 中... 彼... 之... 日... 日... 日...

日数... 柳... 人... 日...

知床日誌終

書知床日誌後

北蝦夷自我而拓之則可以鳩集夷民包括海陸為恢復舊壇之基真千萬年無窮之利也... 有不可勝言者... 上君子不可不深長思慮... 折虜人之衝也... 行蝦夷跋涉探歷窮谷險崖莫所



不至頃日見訪予叩北蝦夷事則覺
 談論明晰詳備絕島荒涼景象
 恍在目中躡實地者身懸空論說不
 同予甚感其用心焉適其所著知林
 日誌刻成求跋尾因題數言道
 北方防備不可一日為懈也
 文久三年七月抄

松岡豐田亮

